

大学生の対人関係価値に関する中日比較研究

— 個人主義、集団主義、間人主義の構造を巡って —

王 珂 (学校法人河原学園)

中 村 雅 彦 (愛媛大学大学院教育学研究科)

(平成17年6月3日受理)

A cross-cultural study about interpersonal values between Chinese and Japanese university students: On the structure of Individualism, Collectivism, and Contextualism.

Ke Wang Masahiko Nakamura

1. 問題と目的

個人主義と集団主義

集団主義・個人主義に関する研究は、心理学で活発に検討されているテーマの1つである。18世紀の英国の思想家たちは、集団主義 (collectivism) と個人主義 (individualism) の用語を使用し始めた。以来、集団主義と個人主義に関する研究は様々な領域で行われてきた。

Hofstede (1980) は、最初に個人主義と集団主義についての集約的な概念を提唱した。Hofstede (1991) は1960年代の終わりから70年代の初めにかけて、社会的行動や思考における差異を検証するためにIBM社の各国の社員を対象に質問紙による比較文化的研究を行っていた。各国とりまとめた回答間の相関を求め、“権力格差”、“不確実性の回避”、“個人主義”、“男性性”の4因子を得た。それによると、彼は、個人主義と集団主義のそれぞれの特徴を以下のように定義している。まず、個人主義傾向の強い国の特徴として、①個人の目標の尊重、②自己の内面の抑制、③プライバシーの尊重、④内集団(家族、友人)の他に興味が類似する未知の成員により構成される内集団が存在すること、⑤個人の意志決定が集団による意志決定優先、⑥自己のアイデンティティとしての職業、政治の平等性の主張等があげられる。一方、集団主義傾向の強い国の特徴としては①伝統、集団規範に盲従しがちな社会行動、②内集団と外集団の明確な区別、③内集団の代表者の特性に埋没しがちなこと、④内集団の宗旨が個人の信仰に優先すること、等があげられる。またHofstede (1991) の調査結果によると、個

人主義傾向の強い国としては北米、欧州諸国、集団主義傾向の強い国には南米諸国、タイ、中国などがあげられている。

これに対し、Triandis, Bontempo, Villareal, Asai, & Lucca (1988) は、相互依存性の概念を用いて個人主義と集団主義を対比した。すなわち、“促進的な”相互依存(個人と集団の目標に一致性がある)が存在するとき、人は集団主義になる。“妨害的な”相互依存(目標間に負の相関がある)が存在するとき、人は葛藤をもつ。個人的な目標と集団の目標とは関係がなければ、人は個人主義になると考えた。さらにTriandis (1983) は集団主義に(Allocentrism)を、個人主義に(Idiocentrism)を対応づけて定義している。つまり、個人主義とは、他者からきわめて自立的で、個人の目標を尊重し、競争原理を優先させるタイプである。これに対し、集団主義とは、個人の目標、価値、態度が内集団成員によって強く影響を受け、協力原理を優先させるタイプである。従来の研究においては、西欧諸国を個人主義の価値をもつ国としてとらえ、日本、中国などのアジア諸国を集団主義の価値を持つ国であると位置づけてきた。

日本における研究を見ると、たとえば、高野・纓坂(1997) は、集団主義とは、個人が集団に隷属しているので協調性が高いが、個我が確立していないために個性に乏しく、集団の目標を個人の目標より優先することをさしている。他方で個人主義とは、個人はそれ自身が目的であり、同調への広範な社会的圧力の重みに抗して、そのようなものとして自己を理解し、自分自身の判断を磨くという信念をもつであると述べている。

第3の価値：間人主義の概念

前述したように、欧米の研究者たちは、欧米諸国を個人主義の価値をもつ国としてとらえ、日本、中国などのアジア諸国を集団主義の価値を持つ国であるとする見解を示している。しかし、日本の研究者は、日本が果たして集団主義的な国であるか否かについて議論を行っている。高野・纒坂他（1997）は、従来の集団主義・個人主義に関する、統制された条件の下で日米比較を行った10件の実証的研究を展望した。その結果、日本人の方が米国人より集団主義的であるとする通説を支持していないと述べている。つまり、日本人は通説のように集団主義的ではなく、むしろ個人主義的傾向を持っているという知見が多く見いだされている。

纒坂（1996）は個人主義・集団主義を反映した価値基準の比較文化的な研究を行った。その結果、日本人大学生は集団主義の特徴である相互依存や所属集団に対する忠誠心を強く肯定せず、むしろ個人主義の特徴を持つ価値基準を肯定することを見出している。

山田（1998）は、大学生を対象にして個人主義志向性、日本的集団主義志向性と自己実現の関連について調査をした。その結果、①日本の青年の個人主義志向性が日本的集団主義的志向性より優位である、②同時に両志向性は正比例の関係を持っていることが見出された。このように現在の個人主義傾向に関わる現象の背景には、集団主義的な土壌を持つ日本の社会に導入された西欧的な個人主義が、西欧との社会的環境の違いから、日本独自のやり方で志向され、その姿を変えてきたものと山田は考えている。

このように、“日本人は必ずしも集団主義ではない”という知見が示されたことを契機として、その後日本の研究者から様々な日本人論が出てくるようになった。その中で注目されるのは、濱口（1998）の提唱した「間人主義」（contextualism）という対人関係価値に関する概念である。

濱口（1998）によれば、間人主義は、つきのような3つの属性をもっている。

①相互依存主義：日本の諺「人はお互い」、「人は情け」が示唆するように、社会生活を自力のみ頼って送ることは事実上不可能であり、相手に親身になった世話をし、また相手から思いもかけない情けをかけてもらう、とい

った互助が不可欠である。相互依存は人間の本態であり、積極的に他を支えていこうとする考え方である。

②相互依頼主義：相互依存が実現するためには、人どうしが信じ合える存在でなければならない。その際、相互にプライバシーを尊重することによってほどほどの信頼感を保つのではなく、むしろ無防備のまま自己をさらけ出すことによって絶対の信頼を得ようとするのである。間柄への信頼が可能であれば、自分の期待するものに相手はきっと応えてくれるに違いないという確信もまれる。こうした相互の思惑を指している。

③対人関係の本質視 相互信頼の上に構築された間柄は、戦略的な観点から操作される手段的なものではなく、それ自体価値あるものとして、尊重していこうとする理念。何らかの必然性に由来する関係。すなわち「縁」によって成り立つ間柄というものは、どこまでも保持されるべきものであって、相手が役立つ存在であるかどうかの判断によって、雨後の交際を継続するか否かは決められない、という考え方である。

濱口（1998）によれば、間人主義は、ことに日本や東アジアで、現代においても人々の行動や思考の基底を形作っているという。濱口は、間人主義の中心に「関係体」を置き、「個別体」対「関係体」という対立関係を「関係体」に重点を置いて、20カ国で、「対人関係観（間人主義・個人主義）についての国際比較調査」を実施した。その結果、従来の比較社会・文化論で欧米社会は「個人主義」、日本社会は「間人主義」（集団主義）という通説は必ずしも正しくないことが見いだされた。また間人主義は国際的、普遍的に存在していることも認められた。それに対して、石井・久米・遠山（2001）は、間人主義は「欧米社会と日本社会とは大きく異なる」とする「日本＝特殊論」を過度に強調しすぎであり、文明の落差から生じるコミュニケーション様式の文化的側面の差異に関心を払うべきではないかと批判している。

問題の表明

以上述べてきたように、対人関係価値に関する比較文化的な研究では、西欧諸国が個人主義で、アジア諸国が集団主義であるという通説がまことしやかに述べられている。しかし、日本の研究者はその通説の妥当性について検証を行い、日本人は個人主義志向性が日本的集団主義的志向性より優位であり、また同時に両志向性は正比

例の関係を持っていること（山田，1998）、特に日本人は特別な価値、すなわち「間人主義」という価値観を持っているという議論も提出されている（濱口，1998）。

山田（1998）の主張するように、現在の個人化傾向に関わる現象の背景には、集団主義的な土壌を持つ日本の社会に導入された西欧的な個人主義が、西欧との社会的環境の違いから、日本独自のやり方で志向され、その姿を変えてきた流れがある。というのは、対人関係価値は社会の環境・経済の変化に伴って、その重心が移行してきている可能性を指摘できるからである。すなわち、従来の日本人は集団主義的であったが、現代日本人の多くは西洋の価値体系を吸収して、次第に個人主義的なものになってきているのではないだろうか。その結果、現在の日本では、個人主義、集団主義、間人主義という異なった対人関係価値が併存している。実際に、森口（2003）は、日本の在学大学生を対象とし、対人関係価値について調査を行った。その結果、現代日本の大学生の中では、間人主義・集団主義・個人主義という3つの対人関係価値が併存することを確認している。

つぎに、中国人の対人関係価値について見ていこう。中国の伝統文化においてはさまざまな教訓、たとえば、君主に忠実であること、親に孝行すること、きょうだいに親身であること、友人に手助けすること、災難から人を救うこと、弱い人を助けること、など一般的に公共の利益を促すものが多い。このことから、中国は典型的な集団主義的な文化を持っているといわれている。

櫻坂（1992）の日・中における個人主義と集団主義に関する比較文化的研究によれば、中国人大学生が相談相手と考えている対象は両親ではなく、友人、教師があげられている。中国人大学生が両親を相談相手と考える理由は、①両親が子どもの生活、知識、気持ちを理解できないこと、②両親と不和であっても両親の面子を立てるために妥協するが、理解しあうことがないがあげられた。中国の昔の家父長制による家族労働の所有における「家」という枠組は、工業化、近代化の出現に従って、個人主義と平等観念の新しい傾向を生み出し、家族関係、孝の観念、結婚、権威に対する青年の態度に影響を及ぼしている。つまり、社会、経済的環境の変化、西洋思想の影響が、中国においても家族関係に変化をもたらしている可能性を示している。

Butterfield（1991）は中国本土と台湾での調査から、中国人の特徴として、面子を保つこと、所属単位、個人より集団の優先することなどをあげている。Butterfieldによると、①中国人は喧嘩をすると面子を失ったり、永久に敵意を持たせないように努力する、②中国では通常、個人の名前を名乗るときに所属集団（職場、学校、出身地など）を紹介する。その個人がどのような対人関係のネットワークをもっているのかを明確にすることが社会生活で重要であるためである。

費（1987）は中国人の生活意識調査で、現代中国において家族主義を支える実体集団としての家族が、急速に衰退傾向を示していることを指摘した。この傾向は社会の発展、伝統的な観念の変化に伴ってきていることも考えられる。

凌（1991）は、中国人が持つ価値観を伝統、功利主義、利他主義の3つに分類した。これらの3つの価値が錯綜しているのが中国人の価値観である。解放前には、伝統的価値、功利主義価値が主流であった。しかし、解放後にこれらは批判され、利他主義的価値が発展したが、経済解放政策後、再び功利主義、伝統的価値が台頭し、利他主義が衰退する現象が見られていると凌は分析している。

千石・丁（1992）が、1990年に行った中学生の日本・中国・米国の生活意識調査によると、中国人はむしろアメリカ人に近い。個人主義と集団主義、温情と奉仕といった人間関係のモノサシでは、中国人がアメリカ人以上に個人主義的であり、決して集団主義者ではない。少なくとも小集団内で相互に自己犠牲を果たし、集団の和を重んじるという日本式の内集団は中国ではみられないと議論した。

現在の中国人はどのような価値観をもっているのだろうか。黄（2004）によれば、現代中国ではグローバル化の影響と、従来型の価値観と社会制度・環境との間で、中国青年の価値観に変化が生じてきていると述べている。財産権が集団でなく個人に属するときに個人主義が出現するとSchooler（1990）の指摘したように、本来集団主義的だった中国では、経済の発展、社会環境の変化、また異文化コミュニケーションの推進、西洋思想と文化の流入などの要因の影響から個人主義的価値が醸成されてきている可能性もある。また濱口（1998）の調査結果

によると、間人主義が国際的に共通性もっていることから、中国においても、集団主義・個人主義以外に、間人主義的価値が存在する可能性もある。

中国と日本では、儒教の影響もあって従来は集団主義であるが、社会の変遷と経済の発展とともに、中国人と日本人は同じように集団主義、個人主義、間人主義という3つの価値観を持っている可能性がある。また、中国と日本は地理的に近隣であり、文化的にも類似性が多く、世界中で中国人と日本人だけが相手の言葉がわからなくても筆談で、ある程度意思が通じる。しかし、Triandis *et al.* (1988) が述べているように、集団主義・個人主義といった社会的パターンが、言語、時代、地理的領域、ある特定の「主観的文化」を反映している。言い換えれば、言語、時代、地理的領域の違いによって、その主観的な文化を反映している対人関係価値も異なるであろう。

以上の問題意識から、本研究では日本と中国の大学生を対象にして調査を行い、中国人の対人関係価値の構造を検証する。また日本人の対人関係価値の構造を再検証し、中日の対人関係価値の異同について比較文化的な資料を得ることを目的とする。

2. 方法

調査協力者の特性

中国の調査は、中国の貴州省と広東省の両地域の大学生452名に対して実施され、性別、出身地、学年、年齢、質問項目の無回答および不備がある者を調査対象として除いた。有効回答数は439名（男性209人；女性239人；平均年齢20.10歳）であった。

日本の調査は、日本の愛媛県の大学生389名に対して実施され、性別、出身地、学年、年齢、質問項目の無回答および不備がある者を調査対象として除いた。有効回答数は349名（男性173人、女性186人平均年齢19.96歳）であった。

質問紙の構成

森口（2003）が作成した対人関係価値に関する質問紙を参考に、日本の大学生と中国の大学生を対象に調査を行った。中国人対象者には、同じ項目内容を中国語に翻訳した後、日本人の中国語教師1名、中国人の日本語教

師1人に翻訳の精度に関してチェックを依頼してから使用し、中国の大学生に調査を行った。質問紙は以下の尺度とフェイスシートから構成される。

- 1) 質問1では、森口（2003）の作成した対人関係価値尺度の60項目から、個人主義、集団主義、間人主義をみる下位尺度の中で因子負荷量の高かった項目を10項目ずつ選んで、30項目からなる短縮版を作成した。「反対～賛成」の5件法により回答を求めた。
- 2) 質問2では、宮下（1987）のRasmussenの自我同一性尺度の72項目から、「同一性対同一性拡散」段階の12項目を抜粋し使用する。「あてはまらない～あてはまる」の5件法により回答を求めた。
- 3) 質問3では、榎本・林・鈴木（1986）の自己実現傾向質問紙の30項目から15項目を抜粋し使用する。「あてはまらない～あてはまる」の5件法により回答を求めた。
- 4) 質問4では、中村（1998）の自己超越傾向尺度の18項目を使用する。「あてはまらない～あてはまる」の5件法により回答を求めた。
- 5) 質問5では、大野（1984）の充実感尺度の53項目から負荷量が高い5項目を抜粋し使用する生活充実感に関する調査項目である。「今の自分にあてはまらない～今の自分にあてはまる」の5件法により回答を求めた。
- 6) 質問6では、中村（1998）の生活満足感尺度の3項目（人生満足感、物質的満足感、精神的満足感）を使用する。「不満である～満足している」の5件法により回答を求めた。

フェイスシートは無記名とし、年齢、性別、学校、学年、出身地のみを記入ようになっていた。なお、本研究において報告するのは、質問1の対人関係価値に関する尺度の結果である。

調査時期

調査実施時期は2004年6月～8月であった。日本での調査では、四国地方の国立大学1校と私立大学1校において授業時間に質問紙を配布し、当日またはその後に回

収した。中国での調査では、広東省の大学1校と貴州省の大学1校に質問紙を郵送し、教官が授業時間に質問紙を一斉実施した後に回収を依頼した。

3. 結果

以下の分析では、統計解析ソフトウェアSPSS12.0 J for Windowsを用いてデータの分析を行った。

1) 中国人大学生と日本人大学生の対人関係価値：探索的因子分析

まず中国人大学生の対人関係価値の構造を見るために、探索的因子分析を行った。対人関係価値尺度については、森口（2003）の調査結果により構造が確認されているので、因子数を限定した上で最尤法、Promax回転による探索的因子分析を行なった。その結果、中国人サンプルに対して、3因子が抽出された（Table 1）。

また、上記の3因子の尺度の内的整合性を検討するた

めに、Cronbachの α 係数を計算した結果、中国人に対して第1因子の「集団主義1」と命名して、 $\alpha = 0.788$ の値を得た。第2因子の「間人主義1」と命名して、 $\alpha = 0.681$ を得た。第3因子の「個人主義1」と命名して、 $\alpha = 0.640$ を得た。各因子の構成項目の合計得点をそれぞれ中国人サンプルの「集団主義1」・「間人主義1」・「個人主義1」の指標とみなし、以降の分析を行っていく。

Table 1 中国人協力者における対人関係価値尺度の探索的因子分析結果

質問項目	因子1	因子2	因子3	共通性
1.16集団の喜びは個人の喜びより大切である	0.894	-0.166	0.037	0.654
1.7集団の利益を優先すべきだ	0.703	0.060	0.051	0.534
1.13集団の立場にたって行動したほうがよい	0.594	0.034	-0.048	0.389
1.22集団からの視線には気を使うべきだ	0.514	0.085	-0.020	0.325
1.4自分を犠牲にしても集団の役に立つ行動をすべきである	0.426	0.160	0.000	0.283
1.14相手とは喜びだけでなく、悲しみも分かち合えるのが望ましい	-0.008	0.580	-0.050	0.346
1.29社会生活では、お互いに意思をはっきり言う必要がある	0.034	0.552	0.157	0.312
1.8社会生活をする上では仲間同士親身になって助け合うことが望ましい	0.035	0.526	-0.065	0.319
1.2相手が困っていれば、その気持ちがわかるので何とかしてあげるべきだ	-0.014	0.489	0.096	0.221
1.23社会生活では、自分のしたいこと、欲しいもの、お互いはっきり言うのは必要だ	-0.033	0.474	0.016	0.206
1.5「人は情け」ということわざもあるように、相手への思いやりが大切だ	0.046	0.439	-0.057	0.232
1.15他人の気持ちをあまり考えず、自分の思い通りにしてもよいと思う	-0.118	-0.110	0.560	0.403
1.30他人にどう思われようとも、それに構わず自分で判断したほうがよい	0.027	0.142	0.553	0.292
1.9自分の意志を貫くためには、あまり他人の気持ちを考えないほうがよい	0.022	-0.175	0.479	0.290
1.24他人の意見に頼らず、自分一人の判断で物事をきめたほうがよい	0.044	0.136	0.446	0.193
1.27他人をあてにすることも、他人から頼られることも望ましくない	-0.057	0.047	0.441	0.197
1.18人に自分のことを理解してもらう必要があまりない	0.081	-0.021	0.424	0.177
寄与率	22.469	12.336	8.414	
累積寄与率	22.469	34.805	43.220	
信頼性係数 α	0.788	0.681	0.640	

つぎに、日本人大学生を対象に実施した調査データについて分析を行った。すなわち、対人関係価値尺度について、因子を限定して因子分析における最尤法、Promax回転による探索的因子分析を行った。その結果、日本人協力者においても、3因子が抽出された（Table 2）。

さらに、上記の3因子の尺度の内的整合性を検討するために、Cronbachの α 係数を計算した結果、日本人サ

ンプルについては、第1因子を「個人主義2」と命名して、 $\alpha = 0.779$ の値を得た。第2因子は「集団主義2」と命名して、 $\alpha = 0.767$ を得た。第3因子は「間人主義2」と命名して、 $\alpha = 0.669$ を得た。各因子の構成項目の合計得点をそれぞれ日本人協力者の「集団主義2」・「間人主義2」・「個人主義2」の指標をみなし、今後の分析を行っていく。

Table 2 日本人協力者における対人関係価値尺度の探索的因子分析結果

質問項目	因子1	因子2	因子3	共通性
1.12相手から頼られなければ、人の世話などしないほうがよい	0.626	-0.109	0.040	0.400
1.15他人の気持ちをあまり考えず、自分の思い通りにしてもよいと思う	0.591	-0.030	0.009	0.349
1.6他人が役に立つ行動をすべきである	0.566	0.127	-0.034	0.339
1.21他人が失敗して、冷たくされていても、本人に責任があるのだからそ知らぬ顔をしてよい	0.564	-0.030	0.014	0.317
1.3自分の役に立つ人としかつきあわないほうがよい	0.539	0.143	0.028	0.296
1.9自分の意志を貫くためには、あまり他人の気持ちを考えないほうがよい	0.537	0.024	-0.013	0.291
1.27他人をあてにすることも、他人から頼られることも望ましくない	0.510	0.016	-0.071	0.282
1.18人に自分のことを理解してもらう必要があまりない	0.454	-0.077	-0.152	0.274
1.24他人の意見に頼らず、自分一人の判断で物事をきめたほうがよい	0.410	-0.082	0.212	0.179
1.7集団の利益を優先すべきだ	-0.004	0.677	0.055	0.465
1.19集団に貢献することを行動目的とするのが望ましい	0.009	0.636	0.015	0.404
1.10集団の判断で行動を決定するのが望ましい	0.078	0.614	-0.068	0.382
1.13集団の立場にたって行動したほうがよい	0.010	0.606	-0.019	0.366
1.16集団の喜びは個人の喜びより大切である	-0.040	0.526	0.053	0.286
1.4自分を犠牲にしても集団の役に立つ行動をすべきである	-0.117	0.495	0.001	0.265
1.25仲間内の慣例に従い行動したほうがよい	0.068	0.421	-0.089	0.188
1.29社会生活では、お互いに意思をはっきり言う必要がある	0.008	0.091	0.812	0.669
1.23社会生活では、自分のしたいこと、欲しいものを、お互いはっきり言うのは必要だ	0.028	-0.064	0.645	0.410
1.26自分というものをしっかりもって世渡りをするべきだ	-0.026	-0.060	0.493	0.251
寄与率	18.320	15.750	9.516	
累積寄与率	18.320	34.070	43.590	
信頼性係数 α	0.779	0.767	0.669	

2) 確認的因子分析による中日協力者の対人関係価値の構造

上記の探索的因子分析の結果に基づいて、共分散構造分析プログラム（Amos4.02）を用いて、確認的因子分析を行った。

対人関係価値は、集団主義、間人主義、個人主義の3因子から構成されていると想定した。さらに、集団主義は、集団依拠主義・集団信頼主義・集団関係の本質とい

う下位概念から構成されている。間人主義因子では、相互依存主義・相互信頼主義・対人関係の本質視という下位概念から構成されている。個人主義因子は、自我中心主義・自己依拠主義・対人関係の手段視という下位概念から構成されていると考えた。中日の大学生の集団主義因子、間人主義因子、個人主義因子に関連づけられる項目を観測変数として用い、確認的因子分析を行った。

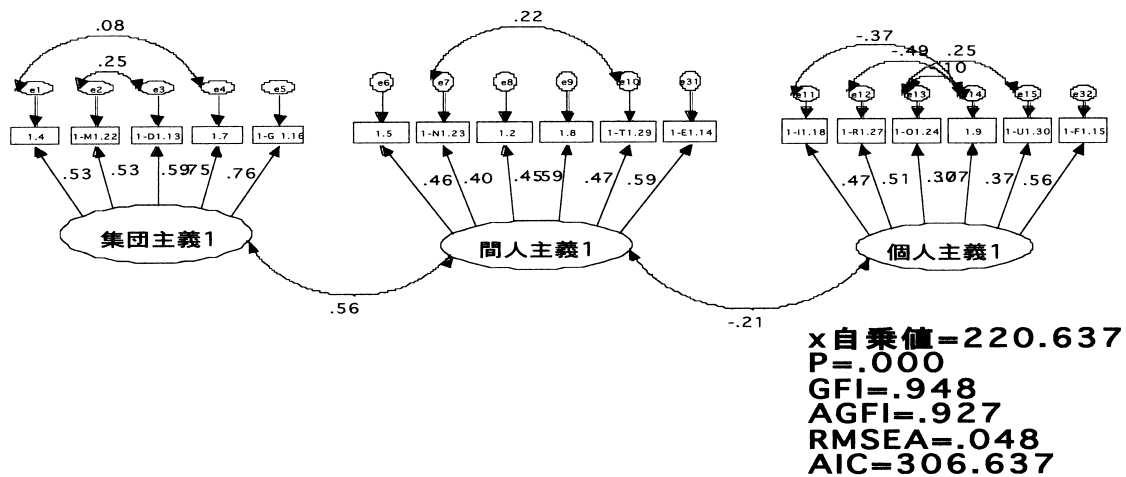


Fig.1 中国人協力者の対人関係価値の構造

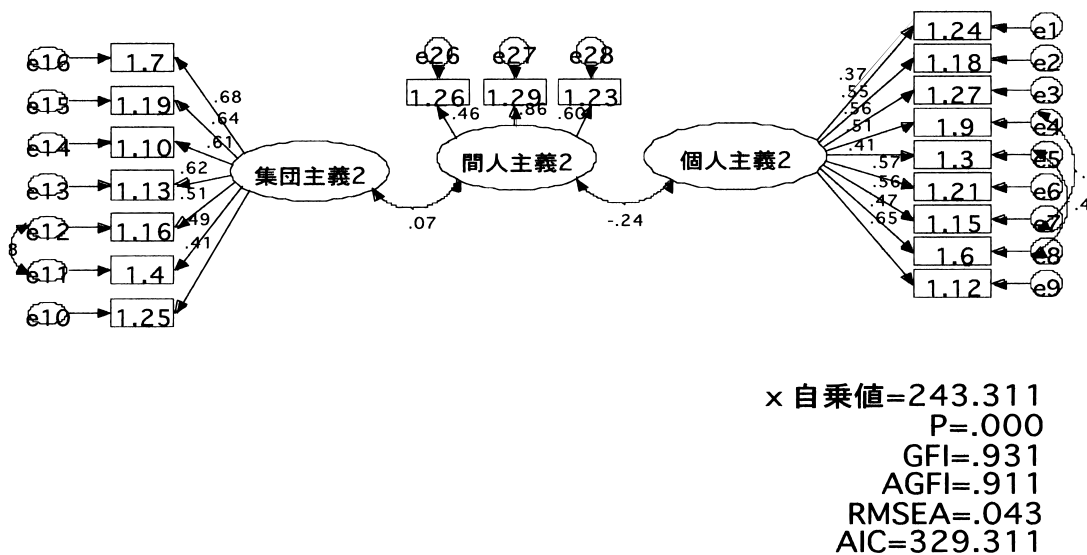


Fig.2 日本人協力者の対人関係価値の構造

確認的因子分析の結果は、中国、日本のデータともに高い適合性指標を示しており、対人関係価値を個人主義、集団主義、間人主義の下位構造から捉えようとすることに一定の妥当性があることを意味している。

以上の結果より、本研究における調査協力者においては、中国と日本には集団主義、個人主義、間人主義という対人関係価値の構造が認められるが、その項目内容を見るとそれぞれ異なった構造も見いだされたとと言える。

4. 考察

本研究においては、社会の環境、経済の変化に伴って、中国人の対人関係価値が移り変わってくるはずであり、現在の中国では個人主義・間人主義・集団主義という3つの対人関係価値が存在することを想定した。また、日本と中国の社会環境が異なるため、対人関係価値の構造にも差異が生じる可能性も考えられた。そこで、中国人と日本人の対人関係価値の構造の異同について比較文化的な資料を得ることを目的とした。

対人関係価値尺度について、最尤法、Promax回転による探索的因子分析を行った。その結果、中国人サンプルの対しても、日本人サンプルに対しても、3因子が得られた。その内容を森口（2003）の結果と比較して見ると、当初想定したように中国、日本ともに集団主義、個人主義、間人主義という3つの対人関係価値が存在することが確認された。

とはいうものの、中日の大学生の因子構造には違いも認められる。従来の集団主義的文化の中国では、社会的環境の変遷と情報化社会の到来、世界から多様な価値・文化が流入してきたことによって、集団主義的文化の上に個人主義さらに間人主義という2つの価値も存在していることが見いだされた。また、中国と日本との対人関係価値の構造が違うのは、Triandis *et al.* (1988) の言う集団主義・個人主義といった社会的価値が、言語、時代、地理的領域が異なることによって、独自の構造が反映されているものと考えられる。

まず、中国人の対人関係価値を見ると、「集団主義因子1」の5項目では、項目1.16の「集団の喜びは個人の喜びより大切である」、項目1.7の「集団の利益を優先すべきだ」、項目1.13の「集団の立場にたって行動したほうがよい」、項目1.22の「集団からの視線には気を使う

べきだ」、項目1.4の「自分を犠牲しても集団の役に立つ行動をすべきである」が含まれている。それは、Triandis *et al.* (1988) が述べたような“集団主義文化は集団の利益を強調する、集団主義者は地位意識がより希薄である、集団主義者は義務さえ果たしていれば何もうまくいくものと期待しているのである”といった特徴を表す因子であるといえる。

これに対し、日本人の「集団主義因子2」の7項目では、項目1.7の「集団の利益を優先すべきだ」、項目1.19の「集団に貢献することを行動目的とするのが望ましい」、項目1.10の「集団の判断で行動をしたほうがよい」、項目1.13の「集団の立場にたって行動したほうがよい」、項目1.16の「集団の喜びは個人の喜びより大切である」、項目1.4の「自分を犠牲しても集団の役に立つ行動をすべきである」、項目1.25の「仲間内の慣例に従い行動したほうがよい」が見られる。このことから、日本大学生では、集団主義的特徴を反映しているほか、集団の判断で行動をしたほうがよい、仲間内の慣例に従い行動したほうがよいなどの日本社会の集団内関係の本質視という特徴も反映していると考えられる。

つぎに、中国人の「間人主義因子1」の6項目では、項目1.14の「相手とは喜びだけでなく、悲しみも分かち合えるのが望ましい」、項目1.29の「社会生活では、お互いに意思をかつきり言う必要がある」、項目1.8の「社会生活をする上では仲間同士親身になって助けうことが望ましい」、項目1.23の「社会生活では、自分のしたいこと、ほしいものを、お互いはっきり言うのは必要だ」、項目1.5の「人は情けない」ということわざもあるように、相手への思いやりが大切だ」があげられる。これは、濱口（1998）が間人主義の特徴として述べた、相互依存主義、相互信頼主義、対人関係の本質視という特徴を反映している。

これに対し、日本人の「間人主義因子2」の3項目では、項目1.23の「社会生活では、自分のしたいこと、ほしいものを、お互いはっきり言うのは必要だ」、項目1.29の「社会生活では、お互いに意思をはっきり言う必要がある」、項目1.26の「自分というものをしっかりとって世渡りをするべきだ」などがあげられる。ただ、これらの項目は、間人主義のもと相互信頼主義、対人関係の本質視などの特徴を反映しているが、相互依存主義に

は対応していない。そこで、特に「自分というものをしっかりもって世渡りするべきだ」、「社会生活ではお互いに意志をはっきり言う必要がある」の2項目に着目し、他者とのつながりを重視すると同時に、個人としての価値を持ち判断を行うなどの個人の自立という側面を伴った間人主義の部分的側面を表す因子として解釈した。

第3に、中国人の「個人主義因子1」の6項目では、項目1.15の「他人の気持ちをあまり考えず、自分の思い通りにしてもよいと思う」、項目1.30の「他人にどう思われようとも、それに構わず自分で判断したほうがよい」、項目1.9の「自分の意志を貫くためには、あまり他人の気持ちを考えないほうがよい」、項目1.24の「他人の意見に頼らず、自分一人の判断で物事をきめたほうがよい」、項目1.27の「他人をあてにすることも、他人から頼られることも望ましくない」、項目1.18の「人に自分のことを理解してもらわなければならない」等の項目に高い因子負荷量を与えていた。

これに対し、日本人の「個人主義因子2」の9項目では、項目1.15の「他人の気持ちをあまり考えず、自分の思い通りにしてもよいと思う」、項目1.9の「自分の意志を貫くためには、あまり他人の気持ちを考えないほうがよい」、項目1.24の「他人の意見に頼らず、自分一人の判断で物事をきめたほうがよい」、項目1.27の「他人をあてにすることも、他人から頼られることも望ましくない」、項目1.18の「人に自分のことを理解してもらわなければならない」、項目1.12の「相手から頼られなければ、人の世話などしないほうがよい」、項目1.6の「他人が役に立つ行動をすべきだ」、項目1.21の「他人が失敗して、冷たくされていても、本人に責任があるのだから知らぬ顔をしてよい」、項目1.3の「自分の役に立つ人としが付き合わないほうがよい」があげられる。

このことから、Triandis *et al.* (1988) と同様に、中国と日本のいずれも、個人主義的な価値は、自己充足、自己目的的な動機づけを強調しているといえる。つまり、個人主義者の間では力関係が切望され、それはしばしば達成されもする、などの特徴を反映している。また特に、日本の個人主義因子では、自己中心主義的な対人関係という特徴も反映している。内的整合性を検討した結果から、本研究で用いた尺度にはある程度高い信頼性があるといえることができる。

本研究の調査結果は、森口(2003)の得た知見とは異なるところも多く、今後より多様な地域で、様々な個人属性を持った協力者から調査データを得ることによって、中日の対人関係価値の構造の異同を確かめていく必要があるだろう。

石井他(2001)は、異文化コミュニケーション研究の1つの柱に、人は文化圏を移動する際に直面する適応のプロセスがあると述べている。それと同様に、人が異なった文化圏に移住し、そこで現地の人々といかなる対人関係を構築するのかという問題も、異文化コミュニケーション研究の1つの柱になりうるものである。石井他(2001)によれば、どのような文化的要因が対人関係に影響するかを調査することに、大きな意義があると述べている。したがって、今後の課題として、在日中国人留学生または日本で就職している中国人が日本に移住して、その文化的な差異に直面することによって、実際の対人関係にどのような変化が見られるかについても調査を行う必要があるだろう。

引用文献

- Butterfield, F. 1991 佐藤 亮一(訳) 中国人 上・下 時事通信社
- 榎本博明・林洋一・鈴木貢 1986 青年期における自己実現傾向について(1)-自己実現質問紙作成の試み- 日本社会心理学会第27回大会発表論文集、131-132.
- Hofstede, G. 1991 *Cultures and organizations: Software of the mind.* London: McGraw-Hill.
- Hofstede, G. 1980 *Culture's consequences.* Beverly Hills, Ca: Sage.
- 濱口 恵俊 1998 日本研究原論 有斐閣
- 石井敏・久米昭元・遠山淳 2001 異文化コミュニケーションの理論 有斐閣
- 費孝通 1987 中国の青年・中年・老年 その生活意識調査報告 蒼蒼スペシャルブックレット
- 凌星光 1991 中国の前途 サイマル出版
- 宮下一博 1987 Rasmussenの自我同一性尺度の日本語版の検討 教育心理学研究,35-253-258.
- 森口武2003 対人関係価値観が心理的幸福感に及ぼす影響—青年の自我状態を媒介にして日本社会心理学会第44回大会発表論文集, 184.

- 中村雅彦 1998 自己超越と心理的幸福感に関する研究－自己超越傾向尺度作成の試み－ 愛媛大学紀要 (教育科学) 45, 59-79.
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究-現代青年の心情モデルについての検討-教育心理学研究,32,100-109.
- Schooler, C. 1990 Individualism-collectivism and acculturation modes. *Paper presented at the individualism-collectivism conference in Seoul, Korea July.*
- 纓坂英子 1992 日・中における個人主義と集団主義に関する交叉文化的研究 心理学研究,13, 7-22.
- 纓坂英子 1996 価値基準に関する交差文化的研究-日本人・中国人・韓国人大学生間の比較 心理学研究,17,12-18.
- 千石 保・丁 謙 1992 中国人の価値観 サイマル出版社
- 高野陽太郎・纓坂英子 1997 日本人の集団主義とアメリカ人の個人主義-通説の再検討- 心理学研究,68,312-327.
- Triandis, C.H., Bontempo, R., Villareal, M.J., Asai, M.m &Lucca, N. 1988 "Individualism and collectivism: Cross-cultural perspectives on self-ingroup relationships." *Journal of Personality and Social Psychology* 54, 323-338.
- Triandis, C.H. 1983 Allocentric vs Ideocentric Social Behavior: *A Major Cultural Difference Between Hispanics And the Mainstream: Interim Technical Report ONR.*
- 山田浩 1998 現代大学生に見られる個人主義と日本的集団主義の諸相－自己実現との関連について－ 現代の社会病理,13,59-73.

インターネット引用：

黄凱峰 2004 <http://www.cycs.org/default.asp>

付記：本稿は、王珂が愛媛大学大学院教育学研究科に提出した2004年度修士論文のデータの一部を用いて再構成したものである。